埼玉県	川口市	NPO法人スポーツ･サンクチュアリ･川口

予算額	22,251,382　円

トップアスリートによる巡回指導

巡回指導先団体総数	14　団体			
巡回指導先団体内訳	総合型クラブ	スポーツ少年団	学校	その他
	5　団体	0　団体	3　団体	6　団体

トップアスリート総数	9　名			
トップアスリートの内訳（大会出場別）	オリンピック	国際大会	全国大会	その他
	名	名	8　名	1　名

アシスタントコーチ総数	8　名

指導種目	ラグビー、サッカー、バスケットボール、ボート、新体操、陸上

◆効果を高めるための工夫や取組など

- 申請書作成の段階で、トップアスリート、アシスタントコーチに対し「スポーツコミュニティの形成促進」事業について説明の機会を持ち、この事業を実施する上でどのような効果を求めて進めていくのか？話合いを充分に行った。
- 事業実施期間における相互交流を大切に考え、指導上での対応技術、指導ノウハウを共有するという考えでコミュニケーションを行いながら、それぞれが専門の巡回指導を実施した。
- スポーツコミュニティを創設するために学ぶ場として、フォーラムにて講演会を開催し、また「彩の国スポーツ･元気応援団」として事業に関わったアスリートをスポーツ関係者（行政･総合型クラブ･レク協･地域の愛好者）へ紹介した。

◆成果と課題

〔成果〕

- 平成22年度まで実施した「地域スポーツ指導者育成推進事業」で得たノウハウであるドローイン(インナーコアﾄﾚｰﾆﾝｸﾞ)技術は、全てのスポーツに対応するため巡回教室実施団体より高い評価を頂いた。
- スポーツが苦手だと思いこんでいた子どもたちが巡回教室では、いきいきと参加した。
- 財源確保に悩む地域スポーツクラブで巡回教室を開催できたことで、会員の拡充につながった。
- 別種目のアスリート達の交流によるノウハウ共有が実際の巡回教室や、自身の活動の中で役立った。
- 高校生ボート部への巡回指導によりモチベーションが上がった結果、現在、インターハイ出場を目指して練習中である。

〔課題〕

- アスリートの日程調整については困難が多く、派遣先クラブが希望する日程に派遣出来ない状況もあった。また、短期派遣の場合、周知までの時間が短く参加者を思うように集められないなど、事前準備期間を十分にとることが課題となった。

地域課題解決に向けた取組

<table>
<tr><td rowspan="8">1</td><td>取組の名称</td><td colspan="5">川口発「彩の国スポーツ・元気応援団設立」</td></tr>
<tr><td>趣旨・目的</td><td colspan="5">川口市及び周辺地域の課題として、子どもの体力低下、高齢化などが挙げられる。これらの解決に寄与することが、団体の使命と日頃から考えているが、行政や一般生活者からの総合型クラブの役割に対する認知度は低い。その課題解決をミッションとした「彩の国スポーツ・元気応援団」を設立した。</td></tr>
<tr><td>内容</td><td colspan="5">①「協議会の設置」と「フォーラムの開催」：活動支援広報冊子作成
②「巡回指導体験会」:柳崎小学校、父と子の交流会である柳の会にてダブルダッチ体験
③「スポーツ指導者講習会の開催」:20～22年受託地域スポーツ指導者育成推進事業内容を活用
④課題解決へ向けた教室開催及び企画開発のための研究会 「子ども元気応援教室」ボールで遊ぼう・「シニア元気応援教室」JAZZでリハフィット</td></tr>
<tr><td>対象者</td><td>①専門分野委員、総合型地域スポーツ関係者
②小学校保護者と子ども
③スポーツ指導者
④地域の親子とシニア及びスポーツ指導者</td><td>参加人数</td><td>①60名
②205名
③12名
④親子9組19名、子ども37名、高齢者23名、スポーツ指導者15名</td><td>実施回数</td><td>① 5回
② 2回
③ 2回
④17回</td></tr>
<tr><td>効果を高めるための工夫や取組など</td><td colspan="5">・ ①の協議会については、当初予定していた委員に加え、川口市スポーツ推進委員協議会相談役や、レクリエーション協会の理事長として長年支えてきた方々の力をお借りし、アドバイスを頂きながら進めたことが事業の充実に直接的な効果を生み出す事となった。
・ ②では誰もが入りやすく且つ話題性のあるダブルダッチの企画で校長先生や父兄も参加した。
・ ④では広報川口に事業の取り組みを掲載したところ、地域ケーブルTVが取材にみえ、「ボールで遊ぼう」が紹介された。</td></tr>
<tr><td>成果</td><td colspan="5">・ ①では新しい公共の担い手を目指し、地域コミュニティのつなぎ役としての第一歩となった。
・ ②④では地域の方へ体験や、観ることを通じて直接的に取組を広報できた。ダブルダッチ体験では多世代が参加した。
・ 全ての取組が有機的につながった事業となった。これは協議会委員の前向きな発言と具体的な協力によるものである。</td></tr>
<tr><td>課題</td><td colspan="5">・ ①では記録映像を残したが、今後どう生かしていくのかが課題である。
・ ②④では親子向けや子ども教室として充実させたい。また、被災された方々への支援リフレッシュプログラムでも継続実施への希望を強く望まれ、一過性の支援では自己満足であると感じながらも、団体として事業費を作りだすことの難しさに直面した。</td></tr>
</table>

小学校体育活動支援

派遣先学校総数	11　校

コーディネーター総数	14　名

◆効果を高めるための工夫や取組など

- 事業開始にあたり、地域課題解決協議会委員からの提案により、川口市、鴻巣市の教育委員会校長会で事業内容説明の機会を頂いた。
- 教育委員会にて窓口を担当頂き、各市全小学校に対し、希望調査を実施。結果、川口市6校、鴻巣市5校より派遣依頼があった。実際に希望を頂いた小学校と打合せを行う中で、校長、教頭、ご担当先生からの要望などにより体育活動コーディネーターの役割が明確になり、プロジェクトリーダーより状況に応じて伝えていくためにコーディネーター会議を出来る限り多く開催することとなった。
- 今回、跳び箱の授業について、派遣依頼が多く、急きょ「跳び箱研修」を実施し、補助の方法と見本実技が出来るよう訓練を行った結果、コーディネーターの技術を向上させることが出来た。

◆成果と課題

〔成果〕

- 実際に授業に派遣した後、小学校からは、感謝の言葉を頂くことが多く、役に立っていることが実感できた。このことは、コーディネーター自身のやる気へとつながった。
- 地域の小学校に、総合型地域スポーツクラブとしての日頃の活動について説明する機会を得た。
- コーディネーター自身が授業に参加し続ける中で、思考や言動において成長した場面が見られた。
- 指導者チームが、日頃から研究するスポーツ力をあがるリズムコーディネートプログラムを提供した際、高い評価をいただき、校長先生自らが書いていらっしゃるブログで紹介された。
- 小学校の教員を目指すアスリートが就労の機会を得たことで喜んで事業に関わってくださった。特に「跳び箱やマット運動」では他のコーディネーターの研修に携わり、指導力の底上げとなった。
- 体育授業の中で得意分野かどうかの確認がないまま、児童の前で模範演技を強要される場面があり、当惑したもののチャレンジし、子ども達が応援してくれたことで、ほっとしたという意見がコーディネーターよりあがった。こういった出来事については、校長先生などから、学校としてよい刺激となっているとの評価を頂いた。

〔課題〕

- 教員とのコミュニケーション方法については、まだまだ模索する必要があり、コーディネーターの役割を明確にしていくことの大切さを実感した。
- 当初、一部の授業のみ派遣を希望されていた小学校が、派遣開始後、効果を感じて下さり、全ての体育時間への派遣を希望されるようになった。よって、当初予定していた人員では、小学校側の希望に添いきれず、途中からコーディネーターを増員した。人材の確保が課題である。
- 小学校側からも現教員の跳び箱授業について、研修したいとの養成を頂いたため、今後の課題としたい。
- 小学校の担当教諭との連絡が16時から18時に集中するため、事務局として対応が難しかった。派遣する人数・従事時間などが急に増え、支払い作業などの事務作業に多くの時間を費やした。事業を支える事務局としてもさらに実力をつけていくことが課題である。

本事業全体の成果と課題

〔成果〕

- 全事業を実施するにあたり、地域の方々とトップアスリート、小学校体育活動コーディネーター達の交流によって、従来の総合型地域スポーツクラブの活動に対して、爽やかな風が吹いたような事業であったと実感している。
- 事業実施者、事業に関わった方々が、本事業を通じて、それぞれの立場で「拠点クラブ」の必要性について感じることが出来たことが一番の成果である。

〔課題〕

- 小学校体育活動コーディネーターの派遣、トップアスリートの派遣、どちらの事業も派遣を希望する側との調整に多くの時間を費やすため、団体として既存の活動の充実に力を注ぐことが出来ない状況が生まれたことが反省であり、今後、事業の継続を踏まえた事務局の充実が課題となった。
- 法人が、周囲の総合型地域スポーツクラブや団体内部に対して「拠点クラブ」としての価値を認識していただくようになるよう効果的な広報活動を行うことが、大きな課題である。そういった状況では、多様な立場で事業に関わる者同志のコミュニケーションが事業を遂行するチームパフォーマンス向上の必要条件であり、責任を伴うチーム活動を行うことが出来るよう常にブラッシュアップすることが団体として求められていると感じている。
  そのためには、各事業従事者たちが、数多くの課題克服や難しい局面などを乗り越える経験をした事例を当法人が集積し、それらを生かして「拠点クラブ」確立への道筋を切り開くことが出来るかどうかが鍵であると考えている。
  この事業に必要な資金の調達を行い、全事業を自立し、団体が地域と共に事業を継続していくまでには、まだまだ道のりは遠いが、一歩ずつ進んでいきたい。